

シリーズ

# 新・農業人

26歳の若さで経営継承  
地域の支援を受けながら  
天職の牛飼いを続けていく

## 式地 優貴 さん



しろう  
飼槽の牧草を手前に寄せると、お腹を空かせた牛がめっと顔を出す(左)  
未完熟の穂が残り、短く裁断されているWCSは牛たちの大好物。先を争うように食べる(右上)  
3カ月の子牛。7~9カ月まで育てて出荷する(右下)

事業地 ● 高知県土佐町  
就農年 ● 2017年  
経営規模 ● 繁殖牛62頭  
労働力 ● 本人



## 高まる畜産への情熱

県都高知市から北へ車で1時間。四国中央部に近づくくと、起伏に富んだ地形の合間に棚田の風景が広がる。

高知県土佐町で繁殖牛62頭を飼養する式地優貴さんは31歳。就農してわずか2年目の2018年、26歳の時に繁殖農家の経営を当時53歳の父親から継いだ。高知県独自ブランドの土佐あかうしと黒毛和牛を年間50〜60頭出荷するかわら、水田0.9鈔を所有し、高齢農家から借りた1鈔余りの畑で牧草を栽培する。主力の土佐あかうしは赤身肉のおいしさに定評があり、健康志向を背景に「トサルージ ユビーフ」として市場で高評価を得ている。また、肥料価格の上昇の影響もあって副産物の牛ふん堆肥も引つ張りだこの人気だ。

式地さんは繁殖牛農家の長男として土佐町で生まれた。畜産を志したのは中学生のとき。進路選択で、隣の南国市なんごくにある県立高知農業高校畜産科を志望した。牛が好きで、「生まれ変わっても、牛飼いがしたい」という思いが高校での3年間で一層強まった。

高校卒業後は、東京農業大学農

学部畜産学科を志した。入学前の1年間、静岡県富士宮市朝霧高原にある付属農場で、技術練習生として畜産技術の实地研修を積んだ。同学科で学ぶほとんどが畜産の後継者で、話したのは将来の経営など仕事のことはばかり。こうした環境も式地さんの決意を固いものにした。

卒業後の研修先に選んだのは、実家と同じ町内で約300頭の土佐あかうしと黒毛和牛を飼養し、県内でもトップクラスの規模を誇る川井畜産。国の就農準備資金(月額12万5000円)の給付を受けながら2年間、充実した研修期間を過ごした。川井畜産には畜産のほか、園芸のノウハウを身につけるためにやってきた人たちもいた。受け入れる地域も県内外を問わなかった。研修後の語らいは大学の勉強とは別の刺激となり、式地さんを成長させた。

## 突然の経営継承

式地さんが自家就農したのは2017年、25歳の時だ。驚いたのはその年、父親が52歳の若さで「経営をすべて優貴に継承したい」と言い出したことだった。確かに就農準備資金の受給には「親元就農

を目指す者については、就農後5年以内に経営を継承する」との要件が付されていたが、その機がこれほど早く訪れるとは。式地さんは父が育てた牛を急きよ自分名義に変更し、初出荷とした。

経営継承直後の1年ほどは、目の前の牛の個体管理に懸命だった。研修先で学んだことを踏まえ、エサの食いや健康状態、素牛の成長度合いなどに気を配る日々。当時は『販売金額をもっと上げられたんじゃないか』『もう少し牛を大きくできたんじゃないか』などと考えてばかりいました」と式地さんは振り返る。

そんな継承直後の奮闘が一段落



スキッドステアローダーを操りWCSのロールを運ぶ

し、痛感したのが牛舎の古さや狭さ、動線の複雑さによる作業効率の悪さだった。当時の牛舎は15頭程度しか繁殖牛を入れられず、繁殖牛の数が牛舎の収容頭数を上回っていた。そのため繁殖牛は受胎確認後、出産間近まで放牧せざるをえず、個体管理上の不安も持っていた。幸い町内に新牛舎を建設可能な土地を確保していたため、将来の規模拡大も見据え、式地さんは2019年に新牛舎を建設した。新牛舎は100頭以上の繁殖牛の飼養が可能で個体管理の改善も実現。こうして現在の経営体制が整った。

### 地域の支援に助けられる

土佐町内の繁殖牛農家のほとんどが土佐あかうしと黒毛和牛とを半分ずつ飼って、素牛の価格変動に対するリスクヘッジにしている。式地さんもこの方式を踏襲して経営の基本とし、次々に襲ってくる不安を和らげた。牛を担保に、1頭当たり40万円を上限にした3年間据え置きが無利子融資が受けられるという町独自の肉牛農家支援制度の存在も力になった。

式地さんの牛舎は田んぼの一角を平地にならして建てられてい



WCSはロールごと高く持ち上げ、かまを使って下から食べやすくほぐす

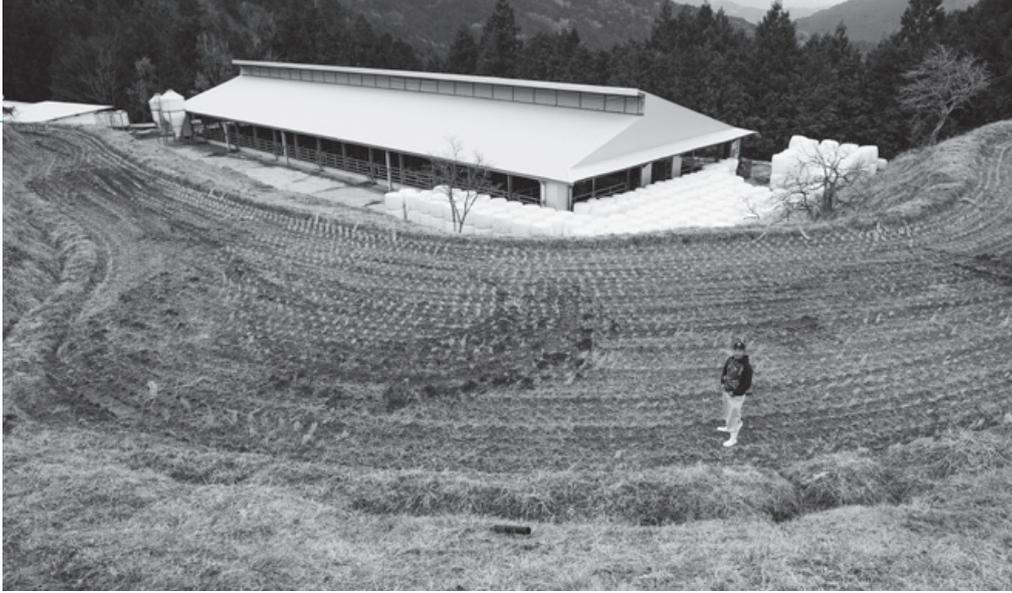
て、近づくとも牛たちが元気な鳴き声を上げる。式地さんはスキッドステアローダーを操りながら稲発酵粗飼料(WCS)の梱包を解き、1頭1頭の様子を見極めながら給餌槽に落としていく。「エサやりは牛たちの成長具合や健康状態などを知るうえでとても大事な作業です。毎日同じ時間に給餌すること、その精度が上がります」と式地さん。

土佐町独自の農業施策となつていくのが町運営の堆肥センターを核とした耕畜連携だ。町は20年ほど前、約1haの土地を用意して発酵堆肥化施設を2レーン設置。農家から出る家畜糞尿や特産のユズ

の搾りかす、都市部から出る生ごみのほとんどを良質の発酵堆肥に転換する仕組みを創設した。できた堆肥は、町内の水田をはじめ苗畑や飼料畑に投入される一方、耕種農家は稲わらなどを町内の牛農家に提供して粗飼料の確保を応援する。

お手本となったのが、同時期に南国市で11戸の農家から始まった「南国市耕畜連携協議会」の取り組みだ。資源の有効利用と土づくりを一挙に進める施策は他の自治体にも広がった。

式地さんらあかうし飼養農家がとりわけ高く評価するのが、堆肥センターの運営経費の大部分を



稲わらの供給源となる水田に立つ式地さん。WCSの詰まったロールペールが牛舎を取り囲むように並び

町が負担するなど家畜糞尿処理への支援措置だ。畜産農家が負担する処理費はトン当たりわずか10円。

要な堆肥の投入を電話一本、しかも無料で受けることができる。畜産農家が散布した場合は10円当たり4000円が作業代として支払われる。

土佐町の畜産農家は独自にWCSの確保にも動く。式地さんの場合、20年ほど前から土佐町内のほか隣接する本山町や南国市で稲わらを調達してきたが、WCSをめぐる南国市の稲作農家との提携関係も数年前から始まった。稲の稈をロール状にする機械や飼料稲をフィルムで密封する機械を稲作農家側が用意。それらで作ったWCSを土佐町の牛農家が1個3630円（稲わらは同1000円）で購入し、南国市の農家圃場に土佐町産の堆肥を投入するというシステムだ。

### 繁殖牛経営を一生続けたい

WCSは町内の他の牛農家の間でも普及し始めた。式地さんらはWCSの効果を聞かれると「よく食べるよ」と答え、稲作農家との関係づくりに努めてきた。

「やがてはWCSを粗飼料のメインにしたいと考えています」と式地さん。昨今の飼料価格の高騰や肥料の値上がりへの対応策として、

耕畜連携が確実に機能し始めていることを実感する毎日だという。

「肉用牛経営を続けることの難しさを日々痛感していますが、注目を浴びつつある耕畜連携が一つの光明です。規模が大きくなると自分のところだけでは粗飼料を賄いきれない。地元農家あるいはもう少し広い地域の農家との連携が欠かせません。こうした動きを止めずにどう回転させ続けていくのか。いまこそ知恵の出どころだと思っています」

式地さんは2022年10月、5年に1度開かれ「和牛のオリンピック」と呼ばれる全国共進会に、町を代表して参加した。鹿児島県の会場で大学時代の知人に再会できたのは嬉しかったが、それ以上に大きな刺激を受けたという。「自県産牛をPRしようと、どの県も全力を挙げていました。意気込みに圧倒されずと緊張し通しました。自分たちはまだまだやなあと思うことの連続でしたが、この経験はきつと今後の経営に役立つと信じています」と話す。

こうしたなか、式地さんは夢を「500頭規模の一貫経営の実現」に置く。肉用牛飼育では6次化して精肉店・焼き肉店開業など消費

段階へ進出することがトレンドの一つになっているが、式地さんは子牛を育て、産ませて、肉にまで仕上げの一貫経営こそが肉用牛経営の醍醐味だと言う。

このほか定年なしで一生牛を飼っていることができるのも肉牛経営の魅力だと考える。

「地域には90歳手前だというのに元気に牛飼いをしている農家があります。大変難しいことですが、頭数は減らしても牛は一生飼いたい」と話す。

その思いは次の言葉に集約される。それは同時に新規就農を志す若者へのエールでもある。

「繁殖牛経営は高齢化が進んでいます。若い人に1人でも多く入ってきてほしいですが、高額な初期投資など担い手が育ちにくい面もあります。父は『金がなかったら、アリのようにつつこつ働くしかない』とよく言っていました。500頭規模の大経営が最終的な目標ではありますが、いきなりドーンと大きな経営をめざすのではなく、父の言うようにこつこつと1頭ずつ牛を育てていくことが大事なかもしれません」

（全国農業新聞 池田 辰雄／文 今井卓／撮影）